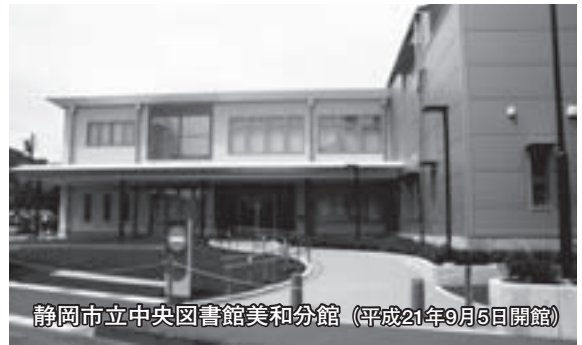


静岡県 図書館協会

会報 No.57



静岡市立中央図書館美和分館（平成21年9月5日開館）

編集・発行 静岡県図書館協会

静岡市駿河区谷田53番1号

静岡県立中央図書館内

平成21年度 第17回 静岡県図書館大会

「みつめ直そう図書館の現在と未来」

第17回となる平成21年度の静岡県図書館大会は、「みつめ直そう図書館の^{いま}現在と^{これから}未来」を総合テーマとして、10月19日(月)静岡市駿河区のグランシップを会場に、904人の参加者を集めて開催されました。

今井宏大会運営委員会副委員長（三島市立図書館長）の司会により、開会式は遠藤裕孝大会運営委員会委員長（沼津市立図書館長）の開会の言葉で始まり、遠藤亮平静岡県教育委員会教育長、土屋光永静岡県図書館協会長（静岡県立中央図書館長）の挨拶がありました。

続く表彰式では、長年にわたって図書館業務に携わり功労のあった図書館職員及び意欲的な活動が評価された優良読書グループの表彰がありました。

その後に行われた、日本図書館協会常務理事の松岡要氏による情勢報告では、各政党の図書館に対する取組みや法改正などについて説明がなされました。

午前の最後に行われたライブトークでは、明定義人氏（滋賀県高月町立図書館長）をコーディネーターとして、清野愛子氏（YAサービス研究会・東京都荒川区立南千住図書館）、足立幸子氏（新潟大学教育学部准教授）をパネリストにお迎えし、「YAサービスの^{ヤングアダルト}現在と^{いま}未来^{これから} ～YA世代のニーズに応えるには～」というテーマで、今のYA世代の特徴とYA世代を取り巻く環境について、社会的な要請や図書館での接し方、さらにはケータイ小説や学校教育との関係にも触れながら、これからのYAサービスの在り方について積極的な提言をいただきました。

午後は、8つの分科会に分かれ、各テーマ別に様々な講演や報告等が行われました。

なお、表彰された方々は、次のとおりです。（敬称略）



☆全国公共図書館協議会表彰

天野 温子（静岡市立南部図書館）

石黒 教雄（袋井市立袋井図書館長）

☆静岡県図書館協会表彰

小林 元子（静岡市立中央図書館）

鵜飼 康生（浜松市立北図書館）

☆優良読書グループ表彰

・静岡県読書推進運動協議会長賞

おはなしボランティア 童 （下田市）

おはなしボランティア「たんぽぽ」 （裾野市）

吉永おはなしの会 （富士市）

朗読グループ かざぐるま （焼津市）

藤枝子どもと本をつなぐ会 （藤枝市）

郷土の民話を読む会 （浜松市）



静岡県読書推進運動協議会長賞表彰グループ

ライブトーク（抜粋）

「YA世代は、どういう世代？」

清野 恋愛とか友達関係とか、親との関係、進路など、この世代特有の課題と言うものを抱えています。また、部活や塾を始めたり、携帯電話を持つようになった子も増え、興味関心や行動範囲が広がります。また「うちら」って言葉にみられるような、大人よりも友達を信頼するという意識を持つ一方で、大人から認められたいという承認欲求も同時に持ち合わせています。

足立 『読書興味の発達』（阪本一郎、1949）という論文がありまして、そこからYA世代は、社会的な自覚が芽生えてくる時期であることが読み取れます。でも、昭和の調査ですから、現在と違うこともあります。マークブレンスキーは、25歳未満、つまり生まれた時からデジタル的なものに触れて育った世代と、それ以上の、生きていく途中でデジタル的なものに接点を持つようになった世代では、凄く考え方が違っていると言っていますので、両者は違うものとして捕らえる必要があるんじゃないかな、と考えています。

清野 今の子というのは、もの心付いた時から携帯電話、インターネットが身近に普及しています。昨年の学校読書調査によりますと、中学生の4割弱、高校生9割強が、携帯電話を持っている。YA世代にとって、携帯って、コミュニケーションツールであり、自己表現の手段でもあり、情報入手手段でもあるのです。となると公共図書館のYAサービスは、20年前と同じ手法でやっていたらまずいなと感じています。

足立 昔だったら、同じ世代が共有する課題があったと思うんですが、今はそれがバラバラで、統一感が見えにくくなっている世代なのかな、と思うんです。だから図書館のような言語材を扱うところは、バラバラになってる人達をどういうふうにコミュニケーションさせていくかっていうことが、大事なポイントになってくるんじゃないかなと思います。

「南千住図書館での取り組み」

清野 以前の南千住図書館のYA棚は、ライトノベルと、岩波新書、岩波ブックレットが置いてあるだけでした。ブックリストも、分厚い空想系の読み物ばかりを載せたようなものだったんです。それじゃやっぱ、手に取られないだろう。もっと役に立つ本とか、いわゆる良書だけじゃなくて、普段本を読まない子達も読みたいと思わせるような本も入れていこう、というコンセプトで新しいブックリストを作りました。

そもそもなんで図書館でYAサービスを行う必要があるかというところ、とりわけ1番大事なものは、YAコーナーやYAの本を提供するだけではなくて、利用教育、



コーディネーターの明定義人氏

ナビゲーションをすることがYAサービスだと思うからです。究極の目的って、たぶん大人の図書館サポーターを育てることだと思うので、単にYAコーナーを作ったからYAサービスをしている、そういうことではないと思います。

「YA世代に求められる読解力」

足立 2003年に非常に読解力が低下したと大騒ぎになったテスト、PISAの読解力の枠組みというものがあります。このテストでは、15歳の子供達に、私的な場で読むもの、公的な用途で読むもの、職業的な用途で読めないといけないもの、教育的な用途、これらの読み能力を計っています。また、「NAEP」（ネイプ）というアメリカの学力調査でも、文学や小説だけじゃなくて、いろんなメディアのテキストをバランスよく読む力についてテストしています。こういったテストで計っている読解力のバランスが、15歳ぐらいで必要なんだということが社会的な要請としてあると考えています。またPISAでは、ホームページやメールの読解力も計るようになってきました。だから紙媒体だけではなく、電子媒体も読書するものとして取り上げて行く必要があると思います。

明定 PISAでは、読む力というのが社会生活の中で活かされてるのであって、国語の授業の中で小説を読むだけで活かされているわけではない。言語生活そのものをPISAとしては計りたいんだということですね。

足立 そうですね。例えば小学校では、いろんなものを幅広く読む指導っていうのは行なわれているけれども、YA世代では、なかなか手が回ってないのが現状ではないかと思うんです。一方で、いろんなものをバランス良く読まなきゃいけないということが社会的に要請されているながら、十分に読むということの訓練を受けずに社会に放り出されると、問題が生じると思うんです。携帯を通して犯罪に巻き込まれたりなんて事例が取り上げられたりしますけれども、情報は誰がどういう意図で送ってきたものか、自分はどういう目的でアクセスし読むのか、もっと吟味しながら、読むという習慣、癖を教えるて行かなければいけないと思っています。

「YA世代の読書量」

清野 YA世代の読書量を増やすためには、きっかけ作りが必要かなと思います。潜在的な読者ニーズはあると思うんです。携帯小説とかに食いついてしまう大半のYA層は、次に何を読むかな、何を求めてるかなというふうにもいつも考えていまして、例えば携帯小説だったら、それを読む層というのは、たぶん恋愛とかいじめとか泣ける話とかに食いついてるのかな、と思うので、そういうキーワードを持った次の本に誘導してあげる、そういったきっかけ作りっていうのを与えてあげれば、結構読んで、その先の読書に自分で繋がっていくのかな、なんて思っています。

足立 YAサービスを一生懸命やってらっしゃるっていうことと、高校生などの生活の時間帯、その2つがやっぱりずれてると思うんです。だから、中学校や高校でもっと学校が直接読書に向かうような仕組みを、学校の間の中に入れてしまうということを提案しています。中学生の読書冊数が少し増加した理由として、朝読書が増

えてきている部分もあると思います。するとやっぱり、中学校や高校で、学校の中で読書の時間を取る、読書が必要な課題を設ける、そういうことが必要になってきていると思っています。それをきっかけにして、もっと読むとか、読んで話し合うとかいうことが、盛んに行なわれるのではないかと考えています。

「携帯小説」

清野 携帯小説を好んで読む子達っていうのは、どちらかといえば、子どもの頃からずっと順当に本を読んできた層ではないんじゃないかなと思っています。だからこの層にブレイクした理由は、この層が求めていたものが、これまでなかったってことだろうなとシンプルに考えているんです。携帯小説は、個人的には面白いと思わないけど、画期的なシステムであることは否定できないので、今後の動向はチェックしたいと思っています。

明定 僕はもうちょっと、携帯をうまく使った小説になればいいのと思うんです。絵文字や地図が出てきたり、物語というのが発展する可能性があるというふうに期待しています。ただただ、横書きで短い文章がずっと並んでいる、ダラダラした書き方、それだけでは携帯小説のいいところを活かせていないんじゃないかなというふうに思います。

「YA世代への本の届け方」

足立 例えばパートナー読書といって、2人で同じ物を読んで、その物について話し合うという方法があります。中学生や高校生に対して、同じ本を読んできて、「私こう思ったよ」ということを語り掛けるような活動ができないか取り組んでいるところです。他にも、教師が何冊か本を紹介して、子ども達はその本を読みたい人で小グループになってもらい、そして役割に特化して読ませる、リテラチャーサークルという読書法があります。これだと、上手に読めない子でも、なんとなく話についていけるということが生じて、案外上手に、難しい本でも読めるようになる読書会になります。また、読書メドレーという、1冊の本を4人の人がグループになって役割を決め、次々に読んでいく方法も考えています。これらを通じて、個々の興味がバラバラになり、コミュニティーがはつきりしない中でも、何か本や読み物を使って、コミュニケーションを取ることができるんじゃないかな、というふうに思っています。

清野 愛知県の岡崎市立図書館では、常連の子達が中心となって発行誌も編集しているし、携帯小説のような軽いテーマで読書会みたいなこともやっている。やっぱりYAの子達っていうのは、そういうのが合ってるという



パネリストの清野氏(左)と足立氏(右)

気がします。他にも読書会で、同年代の子と、ちょっと年齢の上の、高校生とか大学生とかって、すごくいい組み合わせだと思います。YAの子達に接する時、同じ目線ではダメなんですけれども、ちょっと大人からの目線でもダメなんです。気持ちはわかってくれるんだけど、押し付けたりしないような、先輩としての存在みたいなのがいいのかなと思います。

「学校への期待」

清野 宿題とかでやって来る子がいて、閉架書庫の資料を持ってきてくださいと言うんです。けれども、書庫に入ってるということは古い本とかが多いわけで、そこで「この奥付の所を見てごらん、これは50年以上前だし、役に立たない情報かもしれない、そうなると、こうこうだよな」というと、出版年っていう所を見ることは大事なんだというふうに学んでくれる。今のYAの子たちは、自分の求めている情報がどこにあるのかとか、何が信頼性に足る情報なのかとかを見極める力がない、といつも感じるんです。学校教育で、そういうところをもう少し教えていただけるといいと思います。

足立 私も全く同感で、出版年だとか情報の信頼性っていうことを、学校でもっと教えるべきだと思うんです。リアルな物に触れて、それがどういう意図で、どういうふうに発せられたものか、ということを含め指導していくことは、本当に必要だなと思っています。

「一言ずつ意見」

清野 YAサービスというのは、図書館がYAの求めるサービスをしないからYAが来ないんだというふうにまず捉えないと、何も出来ないと思っています。YAと同じ目線にたつて、どういうことを求めているかなという所でやると、常連さんがついてきます。その子達は、将来の図書館ユーザーにつながっていくと思うので、そういう考え方が大事だと思います。あと、本だけ、良書だけを勧めるだけではなくて、ちゃんと社会で生きていける大人を養成するっていうような役割も、公共図書館は持っていると思うので、学校教育や学校図書館とうまく連携しながら、YAサービスを行っていったらいいなと思いました。

足立 中学生高校生に響くような形っていうのは、攻めていくしかないというふうに思うんです。例えば、アメリカの図書館などでは、ビデオ、CDだけじゃなくて、ゲームも入ってきてるんです。やっぱり、さまざまなニーズ、興味がバラバラになってきたので、いろいろなものを用意しなければならない。一方で、それをつなぐコミュニケーションの役割を果たす動きも公共図書館でYAサービス担当の方にやっていただきたいと思います。それにより、学校も、読書の時間だとかで、図書館をサポートする形でYAサービスにアクセスできる仕組みができてくる、そんな将来像を期待したいと思います。

明定 そのつなぐ役目を、私達がしているということ、ただそこにいればいいというだけじゃなくて、やっぱりYAサービスの担当者はYA、児童の担当者は児童、一般の担当者は一般、それぞれの担当相手に向けて、その人達に開かれた形で情報を持ち、開かれた形でコミュニケーションをする、そういうアプローチをしなければいけないでしょう。

分科会

第1分科会【図書館サービス】

「利用しやすい図書館の作り方 ～いつでも、どこでも、だれでも、なんでも～」

(112人参加)

講師 森下 芳則（愛知県田原市図書館長）

市民のニーズが多様化し、合併によりサービス地域が広がっていく中、愛知県田原市図書館長森下芳則氏を講師に迎え、利用しやすい図書館づくりについて考えました。

開会時間前に田原市中央図書館の紹介映像を上映し、はじめに森下氏から田原市図書館の活動についてご紹介いただきました。

田原市は図書館に対する住民の満足度が大変高く、貸出率等も高いとのこと。参加者の皆さんも、自館の図書館づくりの参考にしようと、熱心に聞き入っていました。その中で特に印象に残ったのは、「基本を確実に実行すること」と「職員のモチベーションを高く保つこと」の大切さです。

「基本が大切」とはよく言われる言葉ですが、実際にどう行動すれば基本が徹底されるのか、鈴木敏文氏の著書『商売の原点』等を参考にわかりやすくお話しいただきました。

また、職員のモチベーションを高く保つ方法について、職場内で「価値観の共有」を図る、嘱託職員の待遇に配慮する、必要な人員を確保する等、具体的な例をあげて説明され、大変参考になりました。

「利用しやすい図書館」を目指すため、まず基本を徹底し、働き甲斐のある職場をつくる。その上で資料の充実、配架やディスプレイの工夫、その他各種の活動を行う。この田原市図書館の取り組みは、すべての図書館にとって非常に有効な方法だと思いました。

その後、県内外から参加された皆さんとの質疑応答、意見交換を行い、森下氏からの確かなアドバイスを頂戴しました。

最後に森下氏が話された「大事なものは“人”」「仕事は先人から受け継ぎ、次の世代に受け取ってもらうもの」「誇りをもって働いてきたものを次の世代に！」というお話は、参加された皆さんの今後の図書館運営の指針となり、また図書館員としてのあり方を再認識されるきっかけとなったのではないのでしょうか。



田原市図書館長の森下芳則氏

第2分科会【乳幼児・児童・Y Aに対するサービス】

「子ども読書活動推進計画はいま ～計画開始から数年を経て、各自治体での取り組みと現状～」

(104人参加)

講師 坂部 豪（茨城県水戸市立中央図書館、
JLA児童青少年委員会委員長）

発表者 吉住 幸子（御前崎市立図書館 図書係長・
なぶら子ども読書担当）

子ども読書推進計画が策定から数年を経て、子どもの読書環境をめぐる現状と未来について、水戸市立中央図書館副参事兼副館長兼新館建設室長の坂部豪氏をお招きし、全国の取り組み状況についての話を、また御前崎市立図書館図書係長・なぶら子ども読書担当の吉住幸子氏に事例発表をしていただきました。

まず、坂部氏より、子ども読書活動推進計画が策定になった経緯、国の計画、都道府県別の策定状況や改定の動きについて、数値をみながら説明していただきました。その中で、子どもの読書は、自主的なもので押し付けるものではないこと、子どもに読みなさいという大人が、一番読書をしていないのではないかとという矛盾があることや、本を読まない子どもが多い中、子ども読書推進計画を策定したことにより、読む冊数が増加している結果にはなっているが、本来は数値ではなく、読書の質に重点をおいてほしいことなどの問題点を挙げられました。今後において、子ども読書推進計画を改定していく上で、国、都道府県、市町村は、それぞれの立場での役割があり、市町村の実情を踏まえた計画が、最も大切であることを強調されました。

次に、吉住氏からは、御前崎市における、子ども読書推進計画の進捗状況と主な活動について、実践的なお話をしていただきました。学校への支援として、いつでも子どものそばに本がある環境づくりの大切さを訴え、図書を選書や廃棄に関すること、図書委員会や保護者への支援のほか、保育園、幼稚園へ出向いて読みきかせをすることなど、積極的に取り組んでいる様子が伝えられました。

参加者からの質問についても、お二人の講師それぞれの立場から、助言をいただきました。

最後に、子どもの読書環境は、子育て全体の中で考えていくべきであり、市町村では、本を読むことの価値や意義をうまく伝えていくことが、司書の役割として重要であることを再認識させられた分科会となりました。



水戸市立中央図書館の坂部豪氏

第3分科会【子どもと読書】

「金原瑞人の読書案内 ～ヤングアダルト文学の魅力を探る～」

(381人参加)

講師 金原 瑞人 (翻訳家、法政大学社会学部 教授)

今回は、法政大学社会学部教授で日本YA作家クラブ世話人を務めていらっしゃいます、翻訳家の金原瑞人先生を講師に迎え、「ヤングアダルト文学の魅力」について講演していただきました。

現在では1日に何冊も本をお読みにになり、たくさんの翻訳本を出されている金原先生ですが、本を読み始めたのは中学生になってからだそうです。本を読むことは文字だけという少ない情報量から想像力を働かせていく大変高度な知的作業です。ですから、小学生の男の子が本を読めなくても温かく見守ってあげてくださいとお話しされました。中・高生になって本の読み方、楽しみ方がわかるとはまってしまう男の子が多いそうです。

1970年代後半にアメリカで始まったYAブームは、アメリカ図書館協議会の調査で中・高生の読書習慣が大切であることがわかったにも関わらず、図書館には子ども室と大人室しかなかったことがきっかけで始まりました。

日本にYAが入ってきたのは1980年代で、金原先生も朝日新聞でYAの書評を連載されましたがなかなか根付きません。その後1990年代にYA作家が次々デビューして2000年に入りようやく定着していったというYAの歴史や社会的時代背景を詳しく伺うことができました。

海外文学は固有名詞が人名か地名かということもわかりづらく、読むには気力、体力、記憶力がいります。それは年齢と共に衰えるのでぜひ若いときに読んでほしいそうです。海外文学には、日本文学では絶対にお目にかかれなような内容があつて世界が広がるという魅力があります。みなさんも自分で読んで子ども達に本のおもしろさを教えてあげてくださいと、海外文学の世界への案内をしていただき講演は終了となりました。



翻訳家・法政大学教授の金原瑞人氏

第4分科会【図書館資料】

「未来への資源共有に向けて ～レファレンスサービス・資料の除籍・ 地域間協力による分担保存を考える～」

(70人参加)

発表 資料専門委員会

今日、図書館は地域情報拠点として重要な役割を求められていますが、図書館は様々な問題も抱えています。本分科会では、6名の資料専門委員が、3つの課題を取り上げ、県内図書館に依頼したアンケート調査を基に結果報告と提案がされました。

初めに「資料の提供、案内について」では、レファレンス・サービス、利用者が自発的に調査ができるような工夫、図書館職員の資質能力の活用の3つの視点から、利用者の図書館の利便性を高めるための報告がされました。なかでも、パスファインダーの作成は、利用者の図書館活用のスキルアップが職員の資質の向上につながり、また全ての職員が同レベルのレファレンス対応ができるなど、情報提供の有効的活用手段であると紹介しました。

次に「静岡県内の図書館における雑誌の分担保存について」では、「図書資料費の削減や書架の収容能力の限界の中、県内の多くの図書館が、より多くの雑誌を利用者に提供でき、所蔵スペースの省力化につながるとして分担保存を要望している。しかし、保存場所の確保や雑誌の破損などの問題もあり不安視する声もある。今後の課題として、分担保存を進めるにあたり、どのような形で枠組みをし、運営をしていくのか、その為には、図書館担当者レベルでの会議が必要である。」と強調しました。

続いて「除籍の基準・不要資料選定について」では、県内図書館の除籍基準を調査・分析し、基本となる除籍基準の雛形を作成し提示しました。また、一般書の除籍に際し、どこを着眼点にして不要資料の選定の評価基準とするかについて、分野別と評価項目別の2つの視点から調査分析結果が示され、有効かつ効率的な除籍には、図書館間の協力と資源共有が必要であると報告されました。

最後の意見交換では、雑誌分担保存については、最終的に県立図書館の協力が不可欠であり、今後の検討課題であるとして、分科会は閉会しました。



資料専門委員会による発表の様子

第5分科会【図書館とユニバーサルデザイン】

「公共図書館における障がい者サービス
～視覚障がい者サービスと聴覚障がい者
サービスの現在と今後の動向について～」

(47人参加)

講師 川上 正信(横浜市中央図書館 サービス課主任
(障害者支援事業担当))

山元 亮(大阪府枚方市立中央図書館 主任)

山口 俊裕(大阪府枚方市立中央図書館 係長)

第5分科会は、視覚障害者サービスについて横浜市中央図書館の川上正信氏を聴覚障害者サービスについて枚方市立中央図書館の山元亮氏、山口俊裕氏をお招きしてお話を伺いました。

今回、昼食時間を利用して川上講師のご協力により「DAISY録音図書読書機」の操作デモンストレーションを実施しました。皆さん熱心に講師の説明に聞き入る様子が見られました。

前半で川上氏から「視覚障害者サービスの現状と課題—見えない・見えにくい人もつかえる図書館に—」というテーマで6つの観点からお話していただきました。

見えにくい方へのサービスが進んでいない現状であり、図書館は設備を用意すれば利用者が来てくれるという意識があるが、職員と視覚障害者の意識のバリアは大きい。職員が「人を知る」ことが不足しているので利用者から学ぶことも必要。カセットテープの録音図書に替わりDAISY録音図書が普及し、DAISY録音図書読書機を利用者に届けることが急務である。また、著作権法の改正(障害者福祉部分)のポイントについて等、現場の職員としての立場、経験からのお話でとても示唆に富んだ内容でした。

後半では、「枚方市立中央図書館の聴覚障害者サービス」についてお話していただきました。日本語字幕・手話付き映像資料の制作、CS「目で聴くテレビ」の放送、手話でたのしむおはなし会、手話ブックトークの開催、施設訪問による手話ブックトークの実施、映像資料「視覚障害者のための利用案内」の制作等の取り組みが紹介されました。

聴覚障害者は筆談が苦手な難しい字も分かりにくい。手話のできる職員がいることや聴覚障害を持つ職員がいることが重要で、それがサービスに繋がっていく。いないと気づかないことも多く、サービスが進まなかったり取り組めなかったり、などとても貴重なお話でした。

「聴覚障害者サービスは全国的にも積極的に行っている図書館がない。今後全国の図書館でサービスが進めばお互いに取り入れたり情報交換もできるので是非皆さんにいろいろな取り組みを始めてもらいたい。そして多くの聴覚障害の方に図書館を利用してもらうことを願っている。」との提言をいただきました。



山元亮氏による手話講演

第6分科会【読書会】

「魅力的な読書会
～浜松読書文化協力会の地域にお
ける活動に学ぶ～」

(32人参加)

発表者 大場 康宏(YMYA 会長)

講師 児玉 惇(浜松読書文化協力会 会長)

今回は魅力的な読書会をテーマに、互いに活動を紹介し合い、学び合う時間をもてたらよいと考えました。

そこで、幅広いジャンルで活動を展開している「YMYA」の大場康宏会長の実践発表と、長年にわたり、読書活動に取り組む人々の支援を続けてこられた「浜松読書文化協力会」(以後、読文協と略記)の児玉惇会長を迎え、お話をいただきました。

YMYAとはよく学びよく遊ぶの略。目標は自分づくり、仲間づくり、生きがいづくり。会員約100名は、各々11のクラブに所属。「読書会グループ」もその中のひとつ。メンバーは12人で、秋山末雄氏が代表を務めています。

YMYAが、昨年50周年を迎えられた理由として型にはまらないユニークな試みと、互いに忌憚りの無いコミュニケーションのできる仲間があつてのことと大場会長の実践発表から窺い知ることができました。

読文協の児玉会長からは「お土産をもってお帰りください」というテーマの通り、数多くの示唆をいただくことができました。

「読文協は戦後、浜松市立図書館復興と共にあり、現在に至るまで形を変えながらも一貫して地域の読書推進を念頭に置いてきた。最近の願いは、①横のつながりを作ること。②若い人との交流を意図した読み聞かせグループとの協業。③読書会グループの活性化。浜松市内には現在19の読書会グループがあり、その横のつながりを作り、活動状況を把握。また、中央図書館と読文協がそれぞれ主催していた事業を発展的に共催事業とし「読書推進講演会・読書交流会」を実施、活動を確かなものにしてしようとする。読み聞かせグループには「子どもと本の架け橋」研修会を提供。今後定着していくことが予測でき、手応えを感じている。現在、力を入れているのは読書会グループを元気にすること。今年5月には、「読書会交流会」を実施し、これまで主催してきた「合同読書会」の進展を皆で探った。また、読書会を楽しくする努力も怠らない。」とのお話がありました。

広く、深く、且つ先をも視野に入れ、地道で着実な活動を展開している読文協に多くのことを学ぶことができ、それぞれが抱えている課題解決に向け動きが感じられる分科会となりました。



浜松読書文化協力会の児玉惇氏

第7分科会【学校図書館】

「学ぶ意欲」を引き出す楽しい授業 ～「わかった」から「もっと知りたい」へ～

(78人参加)

講師 戸塚 享 (静岡市立末広中学校 教諭)

講師 松井 聰 (千葉県市川市教育委員会教育センター 指導主事)

学校図書館は、「図書、視聴覚教育の資料その他学校教育に必要な資料を収集し、整理し、及び保存し、これを児童又は生徒及び教員の利用に供する(略)学校の設備」(学図法2条)とされ、本だけでなく、児童、生徒の発達段階に応じて、視聴覚資料や実物など様々な資料を準備することが求められています。またそれらを活用した授業を実際に体験することで、学校図書館の可能性が見えてくると考え、模擬授業を組みました。

そこで今回は、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会事務局次長で、千葉県市川市指導主事の松井聰氏に、台湾の高雄日本人学校での実践をお話いただきました。※平成10年～12年度の台湾での実践は『フォルモサの祈り～台湾 高雄日本人学校の贈り物～』松井聰著(創友社)に詳しく掲載されています。

また、科学特捜隊や、科学館「るくる」での実践や、仮説実験授業で定評のある静岡市立末広中学校の戸塚享氏をお呼びしました。

まず、戸塚享氏は《もしも原子が見えたなら》という授業の前に仮説実験授業を目指すことを、板倉聖宣著『仮説実験授業のABC』(仮説社)を引用し説明しました。次に参加者は、戸塚氏の指導で、「空気が見えたらどのように見えるか」を想像しながら原子や分子の模型作りに熱心に取り組みました。作り方の質問も飛び出し和やかな雰囲気の中で授業が進みました。原子の大きさを実際に体験する模型や、原子や分子が飛び交うCG映像には、「おおっ」と声を上げる参加者もあり、まさに原子が見えた瞬間が展開されました。

松井氏は社会科の授業を通して、児童生徒が自ら学ぶためには、教師がアドバイザーとして学びたいという興味づけをする大切さを語り、探究心の源は児童生徒の中にあることを熱く語りました。「わかった」という成就感を持たせるための様々な教材開発のセンスと努力には感銘を受けました。模擬授業の体験コーナーでは、地理を楽しく体で覚える「社会科体操」に全員で挑戦し、地図帳が体にしみこんだ感じがしました。また、「いろはde歴史カルタ」(松井氏自作)を参加者が夢中で取り合いました。

参加者は、楽しみながら「わかった」ことをもとに、「もっと知りたい」と図書館へ向かう生徒の気持ちを体験することができました。



模擬授業を行う松井聰氏

第8分科会【大学図書館】

「利用者主体の図書館運営」 ～大学図書館運営への学生参加～

(38人参加)

講師 荃田 美保子 (静岡大学学術情報部図書館チーム
図書館情報課長)

講師 上岡 真紀子 (慶應義塾大学理工学メディアセン
ター レファレンス担当)

当部会では、一部の大学図書館で行われている、アンケートなどで学生の意見を採りいれたり、実際に学生を一部の図書館運営に参加させたりする試みに注目し、二人の講師に話をうかがいました。

静岡大学附属図書館の荃田美保子氏には、静大図書館での学生参加について報告していただきました。同館では、学生アルバイトのほかに「学生モニター」が採用され、彼らは、年二回のモニター会議で図書館への要望・提案をし、さらに来館した高校生の見学補助や、学生用図書の選書を行うとのこと。モニターによる選書では、大学図書館の通常の収集対象では「ない」書籍も候補とされ、問題点も浮かび上がったようです。こうした学生参加の効果は不明確であるものの、ここ数年の経年的変化を見る限り、同館の入館者数は平成20年度に持ち直し、貸出冊数はほぼ横ばいという結果となっているとのこと。

慶應義塾大学理工学メディアセンターの上岡真紀子氏には、同大学で行われた図書館の利用調査について報告していただきました。グループインタビューと、LibQUALという図書館用アンケート調査の二つの手法に加えて、上岡氏独自の「利用者を観察する調査法」についても紹介していただきました。LibQUALでは教員・大学院生・学部生の間にあるニーズの違いが把握できたという成果があったとのこと。また、観察調査によって、長時間滞在のためにペットボトルの持ち込みを認めることや、利用者が一人で広く使用できる学習機の必要性が明らかになったとのこと。

発表後もお二人の講師には多くの質問が寄せられ、利用者主体の図書館運営の先進的な事例発表に多くの参加者は感銘を受け、今後の図書館運営の参考になったとのアンケート回答をいただきました。



講師の荃田美保子氏(左)と上岡真紀子氏(右)

静岡市立中央図書館美和分館

平成21年9月、静岡市立中央図書館美和分館が市民サービスコーナーと生涯学習センターとの複合施設（愛称：アカデ美和）としてオープンしました。ここは、美和地区の「学びの一大拠点」として安倍口団地の一角に新設したものです。麻機分館に続き2番目の分館となる美和分館には初年度2万5千冊、最終的には5万冊の配架を予定していますが、図書館ネットワークにより、市立図書館のすべての蔵書（約220万冊）を利用することができます。



こどもからお年寄りまでゆっくりご利用いただけるようコルクタイル貼りの児童コーナーや公園に面した閲覧席を設け皆様に喜ばれています。児童書はもとより、大活字本の充実にも努めています。いままでは図書館には関心がなかった方にも気軽に立ち寄っていただき本の楽しみを味わっていただけるよう親しみやすい図書館を目指します。小規模であるだけに皆様の本についてのご質問にもすぐに対応することができますから、地域の図書館として大いに利用していただきたく、ご来館をお待ちしております。

（静岡市立中央図書館 副主幹 近藤 道子）

<施設の概要>

所在地：〒420-0965 静岡市葵区安倍口団地5-1
 電話：054-296-6501 F A X：054-296-6502
 開館時間：午前9時30分～午後5時
 休館日：月曜日・国民の祝日・毎月第4水曜日（国民の祝日にあたる場合は翌日）
 ・年末年始（12月28日～1月5日）
 ・資料点検期間
 収蔵能力：図書5万冊

職員研修報告（公立図書館等職員研修）

※平成22年2月現在（下半期）

下半期は、主に中堅以上の図書館職員を対象に、専門的理論及び実務、運営等について資質の向上を目的とし、研修を行いました。会場も広く他所に求め、参加者同士の情報交換も行えるよう努めました。

参加された皆さんの、真摯で積極的な姿勢が印象的でした。ご協力ありがとうございました。

（1）専門研修

ア レファレンス応用研修

期日／会場	平成21年9月9日（水）／静岡市産学交流センター（ペガサート7階）
参加人数	45人
内 容	講義とワークショップ 「見直そう！図書館資料の選び方」 講 師 静岡市立御幸町図書館 館長 豊田 高広 氏

イ 図書館運営研修

期日／会場	平成21年10月1日（木）／藤枝市立駅南図書館
参加人数	27人
内 容	講演 「地域の人々に役立つ公共図書館を目指して ～いま、職員がすべきこと～」 講 師 前筑波大学大学院図書館情報メディア研究科 専任講師 濱田 幸夫 氏

ウ レファレンス応用研修（演習）

期日／会場	平成21年11月5日（木）／静岡県総合教育センター
参加人数	40人
内 容	講 義 「インターネット検索を中心とした講義及び演習」 講 師 静岡県立中央図書館 調査課一般調査係（佐藤 れい子、山田 直美、児玉 匡史）

（2）特別研修

ア 県外視察研修

期日／会場	平成21年12月9日（水）／山中湖情報創造館（山梨県）
参加人数	20人
視察館特徴	民間業者が指定管理者となった日本初の公共図書館（平成16年4月開館）